

Title	ドイツ語における形容詞の弱変化と強変化の起源
Author(s)	齋藤, 治之
Citation	ドイツ文学研究 (2012), 57: 25-39
Issue Date	2012-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/155102
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ドイツ語における形容詞の弱変化と強変化の起源

齋藤治之

序 本稿の目的

ドイツ語の形容詞には大きく分けて述語的用法と付加語的用法が存在するが、ドイツ語教育においては、形容詞の付加語的用法では定冠詞類が形容詞の前に置かれると形容詞は弱変化形を示し、不定冠詞類が形容詞の前に置かれると強変化形を示すと教えることが一般的である¹。その際、なぜ形容詞には大別して2つの変化が存在するのか、前者に一貫して現れる -e(n) という語尾は何か、後者の語尾は定冠詞の語尾に似ているがそれはなぜか、という疑問には当然言及することが従来ほとんどなかった。本稿の目的は、ドイツ語の形容詞における述語的用法と付加語的用法の区別、さらにそれに伴う語尾変化の有無の理由、また付加語的用法における弱変化と強変化の成立の起源について考察を加えることである。

I. 形容詞の定義とインド・ヨーロッパ祖語における形容詞の述語的用法と付加語的用法

形容詞は一般に「名詞を修飾・限定してその性質や状態を表す」と定義される。詳しく言えば、形容詞は次の特徴によって他の品詞と区別される：

- a. 形容詞は名詞を直接修飾することができる。
- b. 形容詞は比較級・最上級という比較構造を有する²。
- c. 形容詞はそれ自身の性を持たず、それが修飾する名詞の性に一致する。

古層のインド・ヨーロッパ諸語における形容詞の述語的用法と付加語的用法は現代ヨーロッパ語の用法とは非常に異なる様相を呈しており、それは祖語の状態を反映するものと考えることが可能である。インド・ヨーロッパ諸語の比較から、祖語の主語と述語から成る名詞文 (Nominalsatz) においては、主語と述語を結ぶ役割を担う、ドイツ語の *sein* に相当する繫辞動詞 (コプラ) が存在しなかったことが推定されている。インド・ヨーロッパ語の古層の諸言語では例えば次のような名詞と形容詞の並列においては、形容詞は付加語的用法ではなく述語的用法と解釈される可能性が大きいと考えられている³：

ヒッタイト語：attaš **aššuš** (der Vater ist **gut**)

ギリシア語：ψυχή **ἀγαθή** (die Seele ist **gut**)

ラテン語：nemo malus **felix** (keiner Böse ist **glücklich**)

このように、古層の諸言語では述語的用法においても、*aššuš* (*gut*), *ἀγαθή* (*gut*), *felix* (*glücklich*) などの形容詞が示すように、名詞と同じ男性および女性の語尾を取っていることが分かる。

一方、付加語的意味は形容詞ではなく、次の例が示すように、多くの場合において複合語によって表現されていた：Gr. ἀκρό-πολις (**Akropolis**), ἀργυ-κέραινος (mit **glänzendem** Blitz)。因みに、-ro- という接尾辞を持つ形容詞は後者の例のように複合語において -ro- に代り -i- という接尾辞を示す。このような Gr. ἀργ-ο- (weißglänzend, schnell beweglich) (<*ἀργ-ρο-), ἀργ-ι- (κέραινος); Skt. ṛj-ra- (glänzend, schnell), Ṛj-i-(śvan)(schnelle Hunde habend (リジシュヴァン：人名) のような単独で用いられる形と複合語で用いられる形の間に見られる -ro- と -i- の交替現象は、その発見者 W. Caland に因んで、“Caland (カーランド) 接尾辞システム” と呼ばれており、インド・ヨーロッパ語の古層諸言語において観察されている⁴。

II. ドイツ語の形容詞における述語的用法と付加語的用法

II. 1. 述語的用法の起源

形容詞の格変化に関してゲルマン語、ひいてはドイツ語を特徴づけるのは何と言っても名詞起源と代名詞起源の格変化語尾の混在である（下線は代名詞起源の語尾）⁵：

	強変化					
	ゴート語			古高ドイツ語		
	男性	単数 女性	中性	男性	単数 女性	中性
主格	blinds	blinda	blind/blindata	blint/blintēr	blint/blintiu	blint/blintaz
属格	blindis	<u>blindai</u> zōs	blindis	blintes	<u>blintera</u>	blintes
与格	<u>blindamma</u>	blindai	<u>blindamma</u>	<u>blintemu</u>	<u>blinteru</u>	<u>blintemu</u>
対格	<u>blindana</u>	blinda	blind/blindata	<u>blintan</u>	blinta	blint/blintaz

さらに、ゲルマン語（ドイツ語）の格変化語尾には大きく分けて強変化と弱変化の2種類の区別が存在する。以下は弱変化の例である：

	ゴート語			古高ドイツ語		
	単数			単数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	blinda	blindō	blindō	blinto	blinta	blinta
属格	blindins	blindōns	blindins	blinten	blintūn	blintun
与格	blindin	blindōn	blindin	blinten	blintūn	blintun
対格	blindan	blindōn	blindō	blinton	blintūn	blinta

形容詞弱変化の語尾は名詞の子音 n- 語幹（単数：-ō-, -on-, -en- > ahd. -o-, -on-, -en）と同じ語尾に遡る：

	印欧祖語	ラテン語	ゴート語	古高ドイツ語
主格	*dʰǵʰ(e)m-ō(n)	homo	guma	gomo
対格	*dʰǵʰ(e)m-e/o n -m	hominem	guman	gomon
与格	*dʰǵʰ(e)m- en -ei	hominī	gumin	gomen
属格	*dʰǵʰ(e)m-(e) n -os	hominis	gumins	gomen
呼格	*dʰǵʰ(e)m-ō(n)	homo	guma	gomo
奪格	*dʰǵʰ(e)m-(e) n -os			
所格	*dʰǵʰ(e)m- en -i	homine		
具格	*dʰǵʰ(e)m-(e) n -e/o-hi			

(因みに、主格 *d^hġ^h(e)m-ōn は *d^heġ^hom-s (> lat. humus „Erde“) の所格 *d^hġ^h(e)m-ōn (*auf der Erde Befindlicher* > Mensch) に由来し⁶、この形を基にして「逆成立」(Rückbildung) によって他の格形が造られている。また、この場合、派生接尾辞 -en/-ōn はゼロ所格語尾を取っていると考えられる))

ドイツ語を含むゲルマン語の古い段階においては、上記のインドヨーロッパ諸語と同様に述語的用法においても、名詞と同じ語尾を取っていた。このことは、ゴート語の中性・単数・1格のうち、代名詞起源の -ata は決して述語的用法で用いられないことから明らかである⁷：

ゴート語 (名詞・男性形) : uskiasan **skulds** ist fram þaim sinistam (Mark.

VIII.31)“er muss von den Ältesten verworfen werden”

ゴート語 (名詞・女性形) : wasuh þan **nehua** pasxa (Joh.VI.4) “Es war aber das Passa nahe”

しかし、古高ドイツ語では代名詞起源の -az が述語的用法で用いられる例が存在する：

古高ドイツ語 (名詞・男性形) : du bist dir ... unmet **spāhēr** (Hild.39) “du bist...überaus listig”

古高ドイツ語 (名詞・女性形) : tho ward bi theru wilu thiuh dohter sar io **heilu** (Ot. III.10,45) “da wurde in diesem Augenblick die Tochter alsogleich gesund”

古高ドイツ語 (名詞・中性形) : chūd ist mir al irmindeot (Hild.13) “Bekannt ist mir das ganze (Menschen-)Volk.”

古高ドイツ語 (代名詞・中性形) : ubil boum birit thaz thaz imo ist io **gislahtaz** (Ot. II.23,15) “ein schlechter Baum erzeugt das, was seiner Gattung gemäß ist”

また、古高ドイツ語においても無変化の形はしばしば用いられ、中高ドイツ語では、werden のような動詞の述語として用いられる場合の例外を除いて、現代ドイツ語と同様に無変化の形が一般的である：

古高ドイツ語：wolaga elilenti, harto bistu **herti** (Ot.I.18,25) “O, du bist hart in hohem Grad”

中高ドイツ語：weset iemer sælec unde **gesund!** (Trist.1423) “Bleibt immer glücklich und wohl!”

中高ドイツ語：daz nie kein tãc sô **langer** wart (Trist.3867) “dass kein Tag so lang war”

古高ドイツ語：... ther blinter ward **giboraner**?(Ot.III.20,82) “der blind geboren wurde” (しかし、ゴート語ではヨハネ福音書のこの箇所は…ei blinds **gabaurans** warþ?(Joh.IX.2) のように名詞起源の語尾を取っている)

中高ドイツ語：daz der palas **voller**⁸ wart (Trist.3603) “dass der ganze Saal sich füllte”

II. 2. 付加語的用法の起源

II. 2. 1. 形容詞強変化の起源

上述したように、付加語的用法における独特の格変化語尾の存在は名詞には見られない形容詞の特徴である。つまり、格変化語尾には大きく分けて強変化と弱変化の2種類の区別があることが知られている。まず強変化であるが、これは単数男性 1. -er, 2. -en, 3. -em, 4. -en, 女性 1. -e, 2. -er, 3. -er, 4. -e, 中性 1. -es, 2. -en, 3. -em, 4. -es, 複数 1. -e, 2. -er, 3. -en, 4. -e のように、一見して代名詞の格変化語尾と大変似通っていることが分かる。形容詞になぜ代名詞の語尾が付加されるのかについては様々な考え方がありますが、一つの可能性として次のことが考えられる。上述したように、インド・ヨーロッパ諸語では多くの場合形容詞の

述語的用法と付加語的用法を区別するのに、後者を複合語によって表現したり、あるいは文脈から判断するという手段に頼っていたが、ゲルマン語では両者を区別するために付加語的用法に關係文が用いられたと考えられている。つまり (ein) guter Mann を (ein) Mann, der gut (ist) “良い (ところの) 男の人” と表現したのである。この關係文には繫辭動詞 (コブラ) が存在しないことが大きな特徴である。

このようなコブラを伴わない關係文による付加語的用法の表現は古層のインド・ヨーロッパ諸語に普通に見られる現象である：

ヒットایت語：memiyaš **kuiš** iyawaš (die Sache, **welche** durchzuführen (ist))

サンスクリット語：viśve marúto **yé** sahāsaḥ (alle Maruten, **die** mächtig (sind))

ギリシア語：Τευκρός ὁ **δὲ** ἄριστός Ἀχαιῶν (Teukros, der der vornehmste der Achäer (ist))

上の例では、“(關係) 代名詞 - 形容詞” という順に並んでいるが、並び方を逆にすると“形容詞 - (關係) 代名詞” となり、ドイツ語の gut-er と同じ語形成が成立することが分かる。このように、ドイツ語における形容詞強変化が代名詞語尾を示すのも、インド・ヨーロッパ諸語と同様に、付加語的用法が關係文に遡るからであり、同様の現象はバルト・スラブ語にも観察されている⁹：

Lit. (リトアニア語)

sg.	m.	f.	sg.	m.	f.
主格	geràsis	geróji	主格	jis	ji
属格	gérojo	gerósios	属格	jō	jōs
与格	gerámjam	gérājai	与格	jám	jái
対格	gèraji	gérąja	対格	jī	jā
造格	gerúoju	gerąja	造格	juō	jà
位格	gerańjame	gerójoje	位格	jamè	jojè

Aksl. (教会スラブ語)

sg.	m.	f.	n.	sg.	m.	f.	n.
主格	slěpyj	slěpaja	slěpoje	主格	j /jī/	ja	je
属格	slěpajego	slěpyje	slěpajego	属格	jego	jeje	jego
与格	slěpujemu	slěpěi	slěpujemu	与格	jemu	jei	jemu
対格	slěpyj/ slěpajego	slěpoje	slěpoje	対格	j /jī/	jə	je
造格	slěpyjmī	slěpōje	slěpyjmī	造格	jmī	jeje	jmī
位格	slěpějemi	slěpěi	slěpějemi	位格	jemi	jei	jemi

ゲルマン語の単数男性 1. -er, 2. -en, 3. -em, 4. -en やバルト・スラブ語の jis, jō, jām, jī, juō, jamē という代名詞の語幹は祖語の近称 dies- を意味する指示代名詞 *i- 語幹に遡り、サンスクリット語やギリシア語の関係代名詞 *io- 語幹とは異なる。前者の *i- 語幹は照応的代名詞 (anaphorisches Pronomen) として、下図のようにゴート語および古高ドイツ語の人称代名詞にも現れるが、女性形では s- を含んだ si- によって置き換えられている。因みに、si- はギリシア語 hī (<*sī)、ケルト語(古アイルランド語 sī) にも見られる照応的代名詞語幹であるが¹⁰、ゴート語とドイツ語で *i- が *si- に置き換えられた理由として、*i- が用いられた場合には、女性形主格 (1 格) は *ei-ā (単数)、*ei-ās (複数) のような子音を伴わない母音だけの不安定な形になることを避けるためであることが挙げられ得る¹¹。関係代名詞として用いられる *io- 語幹も指示代名詞に遡る。指示代名詞は文脈・場面において存在する特定の人や事物を指示する代名詞で、すでに挙げられた、あるいはこれから挙げられる人や事物を受ける照応的代名詞とともに代名詞というカテゴリーを形成する。*i- 語幹と *io- 語幹は形態的に似通っており、お互いに非常に近い関係にあることはその語形からも推測可能である。一方、ゲルマン語の関係代名詞は *io- 語幹とは別の *to- 語幹に遡る¹²。

ゲルマン語の指示代名詞 i- 語幹はゴート語および古高ドイツ語では次のような変化表を形成し、その変化は指示代名詞 *to- 語幹の変化と重なっている：

Got.				Ahd.			
sg.	m.	f.	n.	sg.	m.	f.	n.
1.	is	si	ita	1.	er	sī	iz
2.	is	izōs	is	2.	(sīn)	ira	(sīn)
3.	imma	izai	imma	3.	imu	iru	imu
4.	ina	ija	ita	4.	ina	sia	iz
Got.				Ahd.			
sg.	m.	f.	n.	sg.	m.	f.	n.
1.	sa	sō	þata	1.	der	diu	daz
2.	þis	þizōs	þis	2.	des	dera	des
3.	þamma	þizai	þamma	3.	demu	deru	demu
4.	þana	þō	þata	4.	den	dia	daz

現代ドイツ語の形容詞における強変化と混合変化の男性単数1格と中性単数1・4格の語尾の違いを説明するのに、例えば *der gute Mann*, *das gute Kind* では定冠詞の語尾が性・数・格を区別し、*ein guter Mann*, *ein gutes Kind* では定冠詞が無語尾なので代わりに形容詞が定冠詞の語尾を取って性・数・格を区別するというような説明がしばしば見受けられる¹³。上述したように、後に定冠詞となる指示代名詞 *to- 語幹と指示代名詞 i- 語幹の語尾は同じであるが、形容詞の語尾は定冠詞に由来するものではなく、正確には指示代名詞 i- 語幹の語尾に由来する。

ただし、古層のインド・ヨーロッパ諸語では *Skt. agnīm yó vásuḥ* (*den Agni, der gut (ist)*), *Lat. divi qui potes* (*dem Zeus, der mächtig (ist)*) のように先行詞が主格以外でも関係代名詞は主格となっており、このような段階からゲルマン語やバルト・スラブ語のような(関係)代名詞が先行詞と同じ格を示し、さらに形容詞に後続する段階に至るには多くの中間段階が必要であったことが推定できる¹⁴。

また、“形容詞 - (関係)代名詞”のように、指示代名詞が関係代名詞として形容詞に後続した理由としては、代名詞がアクセントを持たずそのため前接

語 (Enklitikon) となったことが挙げられる。実際、関係代名詞はインドヨーロッパ諸語において前接語として第二位の位置を占め得ることが確かめられている¹⁵：

Skt. *prá yāḥ* sísrate sūryasya raśmibhir jyotir bhārantūr uśāso víuṣṭiṣu (RV.10.35.5) (*Die Uśas, die mit den Strahlen des Sūrya zum Vorschein kommen, bei ihrem Aufgang Licht bringend.*)

また、このような関係文は本来意味的に非限定用法で先行詞の内容に説明を加える場合に用いられており、それが後に不定冠詞と結び付くようになった理由の一つであると考えられる。

II. 2. 2. 形容詞弱変化の起源

すでに述べたように、形容詞の弱変化における -en を伴った要素が場所の前置詞 *in* と同じ起源に遡る可能性があることは興味深いことである。この -en という屈折接尾辞 (Flexionssuffix) と自由形態 (freies Lexem) である前置詞 *in* は例えば主格の屈折接尾辞 -s との対比で次の表にまとめることが可能である¹⁶：

	freies Lexem	Derivationsuffix	Flexionssuffix
Nom.Sg. *-s	—	—	+
Lok.Sg. *-en	+	+	+

このように、主格 -s は屈折接尾辞としてしか用いられないのに対して、所格 -en は独立した語彙素として前置詞 *in* に、派生接尾辞として例えばラテン語 *homon-* “Mensch”, ゲルマン語 **guman-* “Mensch” (< **d^hg^hem-on-* “*auf der Erde seiend*”, vgl. ラテン語 *humus* “Erde”) に、そして屈折接尾辞としてドイツ語の形容詞および名詞の弱変化に現れる。因みに屈折接尾辞が派生接尾辞や独立した自由形態になる現象は品詞転換あるいは独立品詞化 (Hypostase) と呼ばれ、

ドイツ語でも (des) Mittags > mittags, zu Frieden > zufrieden などにおいて見られる現象である¹⁷。

この -n 接尾辞は、ラテン語の人名 Catō (属格 Catōn-is “der Schlaue”, vgl. catus “schlau, ein Schlaue”) が示すように「個別化 (individualisierende Funktion)」の機能を持ち、その結果生じた、「限定性 (Bestimmtheit)」という意義特徴により定冠詞と結び付くようになったのである¹⁸。つまり歴史的に見れば、定冠詞が前に来るので形容詞が弱変化するのではなく、弱変化が「個別的」および「特定の」な意味を有するので定冠詞と結び付くようになったと考えられる。しかし、-n 接尾辞の場所的および個別化・限定性という特徴がなぜ意味的にお互いに結びつくのかを説明することは困難なことでもある。いずれにせよ、ゲルマン語では個別化され限定された対象を修飾する場合の手段として -n 接尾辞の付いた形容詞が用いられたと考えられる。

Ⅲ. 古期ドイツ語における形容詞の付加語的用法

以下、古期ドイツ語と現代ドイツ語の形容詞付加語的用法の相違を指摘してみたい。既に述べたように、本来は冠詞と形容詞の強・弱変化との間には直接の関係は存在せず、また、現代ドイツ語では抽象名詞、物質名詞、名詞の複数形に限られている“形容詞+名詞”という結び付きは古期ドイツ語期においては可算名詞にも現れていた(因みにこの時期には可算名詞でも不定冠詞は用いられないことが多くある)：

Bidrahto iz állaz umbiring, thaz was nu **jámarlichaz thing** (Otfrid. IV. 16, 5)

“Bedenke alles ganz genau, wie es nun so jammervoll (wtl. ein **jammervolles Ding**) war“

daz si über mer in **fremediū lant** nâch ir būgeræte streich? (Tristan 8616)

„(obwohl sie Baumaterial in ihrer Heimat fand), übers Meer in **ferne Länder** auf der Suche nach Baustoff flog?“

次の例文のように語形変化しない形が用いられることもある：

wer wær der sich sô **grôz arbeit** iemer genæme durch iuch an, (Iwein 1918-19)

„wer würde sich wohl so **großer Mühe** um Euretwillen unterziehen?“

また、冠詞の後でも語形変化しない形が用いられることもある。この現象は中性名詞の場合に多く見られるが（vgl. ein gut Teil, ein gut Stück）、他の性の名詞の場合にも現れる：

si hâten an sich geleit ir alter ein **gezæme wât**, (Erec 1983-84)

„Sie hatten eine Kleidung (wtl. eine **geziemende Kleidung**) angezogen, die ihrem Alter gemäß war.“

このことは弱変化の場合にも当てはまる：

hie erzeicte sîne hovescheit her Gâwein der **bescheiden** man (Iwein 2714-15)

„Herr Gâwein, der **Formvollendete**, bewies nun seine Wohlerzogenheit“

grôz leit lie si bî dem man unde truoc das **grœzer** dan (Tristan 1333-34)

„sie ließ großes Leid bei ihm zurück und trug noch **größeres** (wtl. das Größere) davon“

さらに形容詞が修飾される名詞に後続した場合にも語形変化しない形が見られる：

dô si mit den swerten hiuwen ûf die helme **guot**, (Nibelungen 2359, 3)

„als sie mit den Schwertern auf die **guten** Helme hauten.“

さらに、強・弱変化が並列する場合も存在する：

Sî nemág mih nîomêr fône **únsúldigemo** bringen ze demo **scúldigen**. (Notker.
Boethius. A 24.29)

„Sie kann mich nie von einem **Unschuldigen** zum **Schuldigen** bringen.“

すでに述べたように、述語的用法の場合は現代ドイツ語と異なり語形変化した形も見られる：

dû bist dir altêr Hûn, ummet **spâhêr** (Hildebrand. 39)

„du bist, alter Hunne, überaus **listig**.“

IV. 終わりに

序で述べたように、ドイツ語教育においては、形容詞の付加語的用法では男性・単数1格、中性・単数1・4格で定冠詞類が形容詞の前に置かれると形容詞は弱変化形を示し、不定冠詞類が形容詞の前に置かれると強変化形を示すと教えることが一般的である。この説明は共時的説明としては何の問題もないが、通時的に見れば説明の順番が逆になっている。文法体系を教えることは純粹の学問ではないと言えるが、やはり学問的事実を正しく把握している必要があると思われる。また、なぜ形容詞には大別して2つの変化が存在するのか、前者に一貫して現れる -e(n) という語尾は何か、後者の語尾は定冠詞の語尾に似ているがそれはなぜか、という疑問も極めて難解であるが、この問題に付随するドイツ語の形容詞における弱変化と強変化の成立の起源についても多少なりとも知識を有する必要があるように思われる。

注

- 1 Eisenberg, Peter. 1989: Grundriss der deutschen Grammatik. p.155f.
- 2 Hofherr, P. Cabredo/ Matushansky, Ora (Ed.).2010: Adjectives (Formal analyses in syntax and semantics).p.2
比較級・最上級という比較構造を有することが形容詞の特徴であるとする考えはしかしながら、次のような名詞あるいは前置詞句による比較表現の存在により疑問視されている。
við lönd yfir enn þú vitir manna (Edda, Gðr II.9)(in weiter entlegenen Ländern, als dass dir von den dortigen Menschen Kunde zukommen könnte)
- 3 Kurzová, Helena. 1981: Der Relativsatz in den indoeuropäischen Sprachen. p.16
- 4 Meier-Brügger, Michael. 2010: Indo-Germanische Sprachwissenschaft (9. Aufl.).p.424
- 5 Streitberg, Wilhelm. 1974: Urgermanische Grammatik.p.273
Behaghel, Otto. 1928: Deutsche Syntax Bd. I.p.170ff.
- 6 Lloyd, Albert L./Lühr, Rosemarie. 2009: Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen. Bd.3.p.527f.
- 7 Dal, Ingerid. 1966: Kurze Deutsche Syntax 3. Aufl.p.63
- 8 因みに、現代ドイツ語の Der Himmel ist voller Sterne. “空は星でいっぱいである”、Der Tisch liegt voller Zeitungen. “テーブルの上は新聞でいっぱいである”のような文に見られる voller は述語用法における語尾変化を伴った形の名残りである。
- 9 Schmalstieg, William.R. 1983: An Introduction to Old Church Slavic. p.56f.
Stang, Christian.S. 1966: Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen. p.150f.
- 10 高津春繁 . 1971: 『ギリシア語文法』 .p.145
- 11 Seebold, Elmar. 1984: Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen p.64
- 12 Kurzová, Helena. 1981: Der Relativsatz in den indoeuropäischen Sprachen.p.34f.
- 13 Eisenberg, Peter. 1989: Grundriss der deutschen Grammatik.p.234ff.
- 14 形容詞の付加語的用法における変化語尾の起源を関係代名詞に求める説への反論も当然存在する。Hofherr, P. Cabredo: "Adjectives-An introduction." In: Hofherr, P. Cabredo/ Matushansky, Ora (Ed.).2010: Adjectives (Formal analyses in syntax and semantics).p.17f.
しかし、このような反論は現代語の考察のみに基づいており、サンスクリッ

ト語 : *višve marúto yé sahásaḥ* (alle Maruten, die mächtig (sind)), ギリシア語 : *Τευκρός ὁ δὲ ἄριστός Ἀχαιῶν* (Teukros, der der vornehmste der Achäer (ist)) のような古層の言語の構文には全く言及していない。

- 15 Kuryłowicz, Jerzy. 1968: Indogermanische Grammatik. Bd.2, p.71f.
- 16 Widmer, Paul. Der altindische *vṛkī*-Typus und hethitisch *nakkī*-. Der indogermanische Instrumental zwischen Syntax und Morphologie. p.194 参照
- 17 同じ変化表に属する語の形態的变化に関わる格変化 (Deklination) と新しい語を形成する派生 (Ableitung) は従来厳密に区別されていたが、近年、格変化に属する屈折接尾辞が派生接尾辞になる独立品詞化 (Hypostase) の研究が印欧語比較言語学においても盛んである。印欧語では位格 (Lokativ) 以外に具格 (Instrumental) のような位格と共に周辺のな格を代表する格において以下のように独立品詞化が観察される :
**roth₂-ó*- "Wagen" > **roth₂-i-h₁* „mit dem Wagen seiend“ > ai. *rathí* „Wagenlenker“
Widmer, Paul. Der altindische *vṛkī*-Typus und hethitisch *nakkī*-. Der indogermanische Instrumental zwischen Syntax und Morphologie. p.194
- 18 Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard. 1972: Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. p.58

参考文献

- Behaghel, Otto. 1928: Deutsche Syntax Bd. I . Heidelberg Carl Winter.
- Dal, Ingerid. 1966: Kurze Deutsche Syntax (3. Aufl). Tübingen. Niemeyer
- Eisenberg, Peter. 1989: Grundriss der deutschen Grammatik. (2.Aufl.). Metzler.
- Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard. 1972: Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Frankfurt am Main. Athenäum Fischer Verlag
- Hofherr, P. Cabredo/ Matushansky, Ora (Ed.).2010: Adjectives (Formal analyses in syntax and semantics). John Benjamins.
- 高津春繁.. 1971: 『ギリシア語文法』東京 : 岩波書店
- Kuryłowicz, Jerzy. 1968: Indogermanische Grammatik. Bd.2. Heidelberg Carl Winter
- Kurzová, Helena. 1981: Der Relativsatz in den indoeuropäischen Sprachen. Helmut Buske Velag.

- Lloyd, L./Lühr, Rosemarie. 2009: Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen.
Bd.3. Vandenhoeck & Ruprecht.
- Meier-Brügger, M. 2010: Indo-Germanische Sprachwissenschaft (9. Aufl.)
- Schmalstieg, W.R. 1983: An Introduction to Old Church Slavic. Slavica Publishers.
- Seebold, Elmar. 1984: Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen Sprachen. Vandenhoeck & Ruprecht.
- Stang, C.S. 1966: Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen.
Oslo-Bergen-Tromsø (Universitetsforlaget)
- Streitberg, Wilhelm. 1974: Urgermanische Grammatik. Heidelberg:Carl Winter.
- Widmer, Paul. 2005: Der altindische *vṛkī*-Typus und hethitisch *nakkī-*: Der indogermanische Instrumental zwischen Syntax und Morphologie. In: Die Sprache 45/1-2. pp.190-208.